KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Vg
433.7
4

4337
4

三松藏

斯る時分表のうらへ宇都宮弥三郎友綱ありと呼ぶる声を聞くもハット二人い気もせられうなづき密伺をくざ〳〵き忍び〳〵社へ入こるる程なく入来る宇都宮弥三郎友綱貫桶小脇ゑ大小も長袴ふく者ときき對客の間よ行とふる禊を〳〵向け梶原平三刀引さげ出向ふ

平三 ヤア昨日まぐれい奪どの今日ハ離縁の孫むすめ両人とも たしくと受とる此景時ゲ縁を大なれいのたくさの果報を落をたまけ者の仲るの友綱何用ぞつく〳〵おきやつこと トれいのふだい耳 孫〳〵 他人とるつる宇都宮たゞ今推参仕るハ北条和田畠山千葉之助土肥次郎かくのふ友綱をはじめ伝六名の名代よえ〳〵出されし此友綱ゑふし入べきゑ細ゐり出免なれ○出免なれとの人さて〳〵上変ゑ通りもふく〳〵と首をけ出し〳〵変ゑもつけバふせりぐゑ系とさもト

咲よむんぞと　平三どの　此ときこそ　此　是こそ　武士の道

首この一途の貪慾　下され〳〵　むつの後言　此さま〳〵

ゆゝしうるわ貴でん父子をうゆゝしうけぎぶ〳〵よ　呵嗔べ〳〵と　歌大名

一決さりをぶ〳〵是ぶ〳〵の後言をいゝさめ仁義の武士とあらゝなべ

一命ハいんど惜べ〳〵　先非をくひまびやさる〳〵　所存ふ〳〵ハ是このこび

ふゝこび　蘇生いのるゆゝる生〳〵　返〳〵　これよ　法大名一流の中〳〵　行と此

首いけ〳〵　返さる〳〵　所存ふるゝ但〳〵　ゑざんゝやの為よ　本ゑちのくも　此

くびぶ〳〵　志ふ心ゝ此くび貴でん〳〵　進上いさ〳〵　善悪理非の無んゑを学

切べきの　名代とゝと思慮〳〵　生死のへんとふ分明ようけたまゝふ

○生死のへんとふやさるべ〳〵ことふぶり　平　この梶原よこだそ〳〵　天命ゝてだゝく

切ゝぶやかる平三びを手もり

志ふゝも高慢の鼻たのぶ〳〵と忌〳〵ん志ゝつ法ふ弥三郎ぶ

首を景時よそせい〳〵　返せとゝ　平　いのよも　平　〳〵　智

恵なゝ〳〵ども　五勝をまぶり思ハ付ふる此なんぞの行いとも　進上の此

なぶびたゝ〳〵ふ落ゝつのまつるトふゝ〳〵此をゝふ中〳〵ゝをけふゝ〳〵引ゆせつ

平　をゆゝ人まぶ〳〵お待なされそのの員ふゝくゝもなさるゆい生〳〵返法

所存ふ　平三　だうなゝ員だうりの此ざまどふ〳〵生〳〵返さるべきト

平法いさそと　平　その生のゝ〳〵ふ生員をといけ〳〵返せなんどとい言ゆう

うちうるづき

ぶなさの恩俳かの下世話ふり法比丘尼よ志ぶ出せとゆゝふ〳〵余り

だうな義ぶ〳〵ふる　花実の業被春夏秋冬ちれバさ紀咲びちる人

一生盞り花　前ふぶゆゝ　恥情とふれども盛衰生死の同ドとふり

死ぶものぶ生ふれるい左利ぶ〳〵ちいさ　平　〳〵これさ友猥学文ぶ〳〵ん

をのゝくたもれお身ぶ妹い身ぶ女房身ぶいりゝとハお身ぶ出ふ引ぶう

命を縁者とゑんじや女房子までが苦しまで返済は八十余人の大名衆こ
まさるお取らく上られるゝの猿猴こりやまた子供をくしたもどうぞせん
弥「だまれ景高思慮ふかき畠山ちう柔なんどん心をこめ送られし
此首のぞんざいまで此使なんとしても合点がゆくまいか 平治「ヤアーや
らくそう言廻しても猿猴風に吹立られ跡先そろわぬ。猿ぐりに上鬼
んな物が生かるを理がない言へ 弥「そりや此方のうさ〳〵はせ
ぬ生さ〳〵生されぬか平三どのゝま言〳〵きけ 平「イヤ我人も出かす
返事のなき実は出来まくひ 弥「ヨ人を殺しんをそこなふ我の
思案はでようなん人を生け此まゝいん大てんの変ぶら山とまゝ 平「ヤア
よそ〳〵の思案とへ何がよそ〳〵かサアそれ聞ふ 弥「ヤレ 甚まけは父の
平三どのまできくが相談 平「ヤア舌長な雑言をちくべう者の入ぎる者

居へんじは程の六ツ言てゆるさぬ弥の言うち早く帰れ 弥「いかに同然な横こ
歩むまちな骨とは遠がらくなる気まゝひせんとまうらんぞあれ 平「何が
よそ〳〵 弥「なにが猿猴 両「サアひく聞ふ そのまけきらんと拾なをちらく次方刀まきもをかゝるつが言ひ段をとえげく〳〵
きらん〳〵まるさぬととびりしく友まうこ絶丸ふらくぐ〳〵の太刀さとんき
切ないの出るなまのゑもまちなをけちらくく気えのうさく言ちやまだふしくたん
きぞとどめくくもどうまいぬ まんぞくぐざり 柳「こりやまた何ものふおこらくく事じやてらくし
づまりや此の外 亀「イヤ〳〵ながら切く出るのふ致さうしれ 友「其うへそれ
ながら切く出るのふ致さうしれく 平「やいく悴まちおらぬ稚なくく
も武士のたまりの抜えなしく其刀まげぬ猿が猶おふぬどふいら
まけず抜えなしくサァ其まけを早くらく 亀「アイ友若がいう処よハ
此方の祖父平三殿は御主人の耳を縫ふりく人を損ふげさく侍とく
成へさうふて異見しらく費まうしれそふぞくなされが佬大名がらい

両子相撲ふく
父母の前よ
血戰い
中村哥右門
友綱
菊町
中村三次
友若
市川團藏
景時
榊葉
景高
沢村
国太良
亀九
市川鰕十良

身を責ひらけながら殺しまするとはよもや腹が立まするまいのふ
掃部「サアそりや腹が立ずじや友まろどの〻為にも祖父様なれば夫のそんな
ことはゆふコリや言ぞこなひぞ首ふのふ友若「いゝや言はいで若君
様のお乳母諸大名の子供しいと出會てもけぢく〳〵の血じや
耳へも留りの孫じやのと名そくいふよりも付ぬ夫に惜ふむる依
て祖父様も平治様はいゝ孫さふじやれと弟ふさ平「こりや其方も
ものじや子供中のつき合も撰きらはるゝ父様のおんうらみ平
治様兄様ながら御意見なされ外ぬ大伴様の讒言耳よ
逆ふとやふらう様の御勘當その余は母けふでは前までおかげではげんなされ
いふ誰がおいさめ申すぞ平「だまれ妹をやくに何をいけんげぢく
と言はるゝが御主人のお氣に入出頭する武士の本意

成なふが讒言して是ほど出頭しても夫を妬むは悪ん殺し根
性が育つて魂なんとして〳〵ヤイ友若廿ぢれがおいくちよふてならぬ
只今のは何やまり堪忍して下さりませのと手をはのて俺をしを
ろふ友「いや〳〵命がをしくは其方のふ手をついて侘言せひ菜「ナイよふ
言つてコレこちの子が亀丸に可ふまいのと思ふてゐる慮外なぶ卑劫な
友綱が一子友若人まるまへは知らるぞや夫もこゝよふ人もなげ
なひよふ弥「イヤ夫とへ進が離別されが夫とよばるゝ是へなひきり
なふふ悴れせがれもびつらふく〳〵を喰生らぬ者の魂がは及がぬ
く〳〵榊「いや女の兒女そんなふ此子が友若よかなふまいと思ふく〳〵ろ
弥「いまれざる怪我せうより友君に手をつけて祖父母里い見して
根性なをさせおふと三拝せよ菜「いや〳〵大勢にあなどられ侮つ

来て臆病者にはやまのうる事ハあるまい〳〵　友「何れ此の中に奥ぶも云
由へ隠忍がなりがたい　菓「ま〳〵彼のたつた道理じやけれど捐人にきるも
人によろ進従ハいつくも讒言しられも出るは出るが本望じやと何ふ
身のくさつて根性その血筋をうけて亀丸ハ何りや侍ぐもくいつぐも
なの相手にもならぬと堪忍しや　梛「いや菓町さん伺がふるざんげん
じやげちくぶやのと祖父なそつしらがとく此子が武士ぐるも枕ぐるも
ないふ侍ら〳〵ん魂をぢ御不望ならべおめに掛ふのあやぶ浅草さんも
まへ　菓「いやきつ〳〵ふくれ梛菓さんそつちが武士を見世るのに友若が
両の手ハ働くのぢまいよろいのひよんなるすいひ道し後ぐ後悔さ
せやんせなへられそんなる子言まふより子三人に御異見や他言をとき
し拙が忠孝の武士といふもの　梛「その御異見を此方へなおしくち

れふ中らがなれ此方なこそ娘の役御異見かふしく讒言の罪もこまび
たがよひまれの　菓「イヤ〳〵何方娘ぐも他人に添ぐ他人の菓町何よなる
あそふこななこそ御異見かつて役目として身の気が立つ孫が亀丸
が身のうへじやぞへ　梛「ま〳〵身の上がこまめとく御兼引きもない物を無
利に御異見中さられふる命をこの〳〵もや〳〵しいれ御異見をなさんせん
と友若が身のうへじやぞへ　菓「そんなら見るる友まろが身のうへに成
中うる亀丸が育て何るがつき沿ふ言ハまふより御異見だくくはが
徒ぐ有ふ　梛「そりや皆こつちのいふと亀丸がこのうくにまあるる成めくの
お育てくのふを気のどうふながら見外ぞへ　菓「まア見るるぞや　ト此がむを
母とそく子三人へのよく目くへ
中のぎりも礼義もなくるを　平治「ヤア見苦しい詞何ぢそれ女房ハいめと扣へおれ
平三「いや〳〵まゝかるな嫁や娘がいつぞハ育ぐふを自慢する武士一同の

たしなゑ十一や十二の孫めらが義をたげむか儚ござく追ハ景時が孫
とも云ゝ小氣味のよい奴等でござへ 孫「擬ゑたどの御返答なまりの延
引くびの善悪らけくれまするふ 平三「ヱヽサ子供げんなる首の生死工夫
いたしくれへんとふ併し孫どもが援えるしく切先のきゆくぶをさせ
其上すて其くびを生しるく景時にやむるとも志かれ前すへ景と
きが手たく具よつのふとも孫どもが勝負しぐの生る殺にの返とう
致そふ 弥「扨りや友まろと亀丸が切さきの勝負したの 梯「ヱヽそれあふ
両個とも 平三「そだしくおいを早くらせの 二人「ヲヽ そうと二人が目と目を見合せ ぬきとるかぬかのせらた 平ニ「数
ぐ有ふが孫ぐ有ふが意地を立ぬく身どもが氣性さへぜんあぐ両
人ろまゝまくひ雜ごんそのまゝまへ引れまれ但し友若がころまするう
たろ亀まるが強ひろ 友「いや亀丸こまふない 亀「友若もこまふない

祖父爺をたしつて代り 友「どうぞ爺を孫病者ときけんが代り 二人「どうぞ
とゑ切くらせおふ 平三「まてでのほく身がたろおがく勝負せい 平治「えゑや
人の返答さぐめ晴の勝負じや用意せい 弥「女房と離縁されがにのう
の他人身中より尚それのせうぶ必ずにみまんの働きさせるな 友「アイが
つてんでくむり弁するかゝさんお怪我がなければよいが其方へよつくむりおせ
平治「ヤア見苦しい詞の似合ぬやろく眼をやく人の思案を定むる大
事の勝負おやまよある是く まあるく見物しをろふ目きゝきよろろ
くろは心く氣をくれきられがひけを取らや 菊「あんまそふやと
さんも返事を定める大事のく晴勝負 梯「これぢの爺子誉ふ
まう母ら亀丸首尾よふ手柄しや 菊「友若でかしくたりや 菊「母も
備から見物なる、おりひ切くるふぜのすく夫くがおわひぢうどふどきくたる
をんむいのむみころ乱れなる二人のちやどもいまらやら襷の

ゆり〳〵く提弦のたもとさき手むやくも亀
〳〵友まう祖父母をげう〳〵
じやのざんぐんじやのと言く向かんまんあるに付く捨る友〳〵手〳〵げう
ぐの小雲の身ぐ〳〵と衣を絞ものと悪にゆふ板堪忍なるぐう
く捨る見捨〳〵やアト

○たぶひの掛声立向ふ丈の光り目まさくぎり母ハ涙ゐる憂おりひ
思ひけるき武士の高地うつくしれば下どうけ屋ひく待び
切先ひつまをたつ〳〵と切結ぶ母ハひや〳〵ちやまさま目を
ふさぎ都をあり見まのとちるほど二図のかり有まもたゝれぞ
怨〳〵さまんつよ信ぐる神ちとけとも刀をト三度るりさま〳〵
つけ舎く祈るよ甲冑も情ちやつけこむ刀りゆ〳〵分ぐるまづ
しなる府先へそうと血ぐるる子供ゆりと知ゐる母ぐ氣ゆま乳

たき留ふよも矣なる景時ぐ眼ざ〳〵友綱平治ハ見むきもやら
ぐ二人の母ハ夫まえぐく泣さ〳〵と喰〳〵ぐり十面つるい
ぢ〳〵さ手をひのふどもハ起たぐり又きり待ぶつるぎのひ
ゆり菓町掛菓ハア〳〵と脇よそゐる右方きぐの乱れ〳〵
高ゆ〳〵ふびんさ切切つきゝれつ傷注乃の苦患もうくやと
二枝ハ五体を走る血の涙そちちよげゆ捲面ハぎやゆんの矣
都ゆつさく二人のらゆどもハ悪びれぎ二見ひぐ切ゆふ手も
手ひゆ乱るゆ数ゆ前の疵ぢ〳〵と双方へどふど倒れ
く苦〳〵むゆりさゆ〳〵ゆれく二枝ハ思ひぐりみゆりだき
をこ〳〵

二人
へられ氣をたゝゆよもつくなも疵ハ浅の高まをたゝゆよ拵くたも

ひのふ 兼 へ友若まで 桝 へ亀丸いのふ トいゝつゝ死しめ呼ば 友 へうめ丸逃さ 逃
若逃な 二人 へサア勝負サア よろしくとあゝしめらく立上れども 兼桝 へこれは勝負
は見へて居る其方が勝じや 平三 へいや／＼勝負は付ぬ人間のうごきも
入ぬ虫同前のちつぺいめら生殺しにせられ殺生とても事はなせぬ
をつけれ 兼 へさてはんまりじや爺年端も行ぬ子供らが切合のえ
いとひへばおまへが讒言侍への世のそしりをうけ斯いふ思ひ亡子より
ほが氣なちぢく没るこゝろはないの 桝 へまし よふふくて下さんせ侍
人讒者と言せるが口惜れ無念なとんな思ひ詰て世へ身をすべし
まぬさうろうて不便なと思し召し心を更め兄の非を何くこめるを逃
事を偽しやつて下さりませ 平三 へヤアめんどふな夜迷言さり待んさ
其刀この手へ置れふろ梶原がまごまごないろ比真もの立上つてせう

ぶせいく トいゝのゝの大ご耳より むつくと起て刀をとつて へそれや隠れやせぬ卑怯などこはぢや友若
が見へぬ程よう連て来て下され 桝 へヤアそんなら二人とも 兼 へ折ふ目が
さへぬうちのふ 兄へぬうちのとりゝめる我のこゝろをとまへで兼の目の前にちち見るなぞいざまるあ 兼桝 へこれいのふ是へ気を
もみやんなうつちの負となるく勝じや○勝じやまいのふ 亀 へいや
おれや侍へじやのげぢくじやのと言をうくがにをしれ腹がたつましや
友若を切れば死ぬ 桝 へサアくれれはうつちへ切れて我身へつよい勝
程なりふ堪忍しやく 友 へかゝさん何方じやまつさなもも已や侍じやの讒
者のと様きうまるがにをしれ亀丸をころし逃へなんだてる死ぬく
兼 へ手これ死ぐたもんなや勝負はそなゝ勝じや程なその手へ氣をも
まいとおつとしていつくたものひのふ 桝 へこれ氣をしづめくたのひのふ 友亀 へいや
おりや相手をとめぬがに惜のく 桝 へどうりじや 亀友 へ無念なまいのふ

掛〽もつともじや　友〽くちをしい　掛〽どうりじや　友〽いをしい〳〵　掛〽どうりじや

くとまれのふ　どうり〳〵とあり扎をまくらの若の身をおさへ無念〳〵と我の子ハ子な
りかりいさましくも刀のつかをふとぶりつめ千丈またげで若やもろうたらふの

ちぞけなげなる ハツトたをれし母とも　掛〽ヤレ亀丸ご。のしさナアけなげな気朝と云
ト死ぐのおどろきをうりつゑさト大おき

なからよく〳〵無念な有さのしらくられ此刀をこの手ろな握り詰ているゆへ

なふ　孫〽これ友旦とも同じと刀のつかを握りつめにをしゝそふな死ぐはふの

ぶらな寝ゐるだんまつなま王が同のらん〳〵ぬハ気もつうぶ亀丸すげるかくられ

なと死ゐるとあゝぬいぢぶしき　掛〽いまゝのきらなおも父上や母よられんの

詞ものかに惜しん〳〵といひぶはよ死ござ可愛ひ　孫〽せん域の付死よ

も誇つくさけるぶな二人の子供でおしおつこと只一言ほめし〳〵ぐ〳〵ぐ

さんせられ友つるどの　掛〽平次どの　両人〽これ誉て女つく下さんせのなア

なめし〳〵女つらくいるさ上ゝをせらしにがほをんはのよ刀やるそのがくまたかちろ子か

ほたをそむけし一声づく千まんむれらの涙なり　なりゆるおくうせば此ちうふ平三

くりん〳〵と　平三〽ハヽア蛇ハ一寸よして其気をはのれ梶わらが孫などさゝ小きさの

おなぐめ

よい死ざかなされられ奴らじやなア　孫〽うげ時どの亀丸と友若が勝負ハ

ごらん後なさる通り其首の生死のへんとう分明ようけあわふ　平三〽こび

つちよどもが二人どる勝負も分らぶくくばりし故へんとうを仕切となふう

孫〽たゞしその首いろはべきはしはんがまづでさぬろ　平三〽此の首の生せふう

何の工夫まるおや及がぬ皮のたくばせつく〳〵ぼろふ　平次〽ムウ去りや其首を

いろちべきは五番がふるるな　平三〽そこけ山北条なんどがなの智恵をかる

いゝ難題この首を生せといふの家はづつり帰りし静よしつ手のたを子を

懐胎これをいくさまり安産させ頼朝公の御前をとりなし義経のか

めいを梶原のよらり立のといふは何とぞの死首のいの世ゆう何と鄙ぐ

有ふがや　友つなえろ王　孫〽ハヽア驚いつらうけ謀慮伊達錦戸が野心の起し

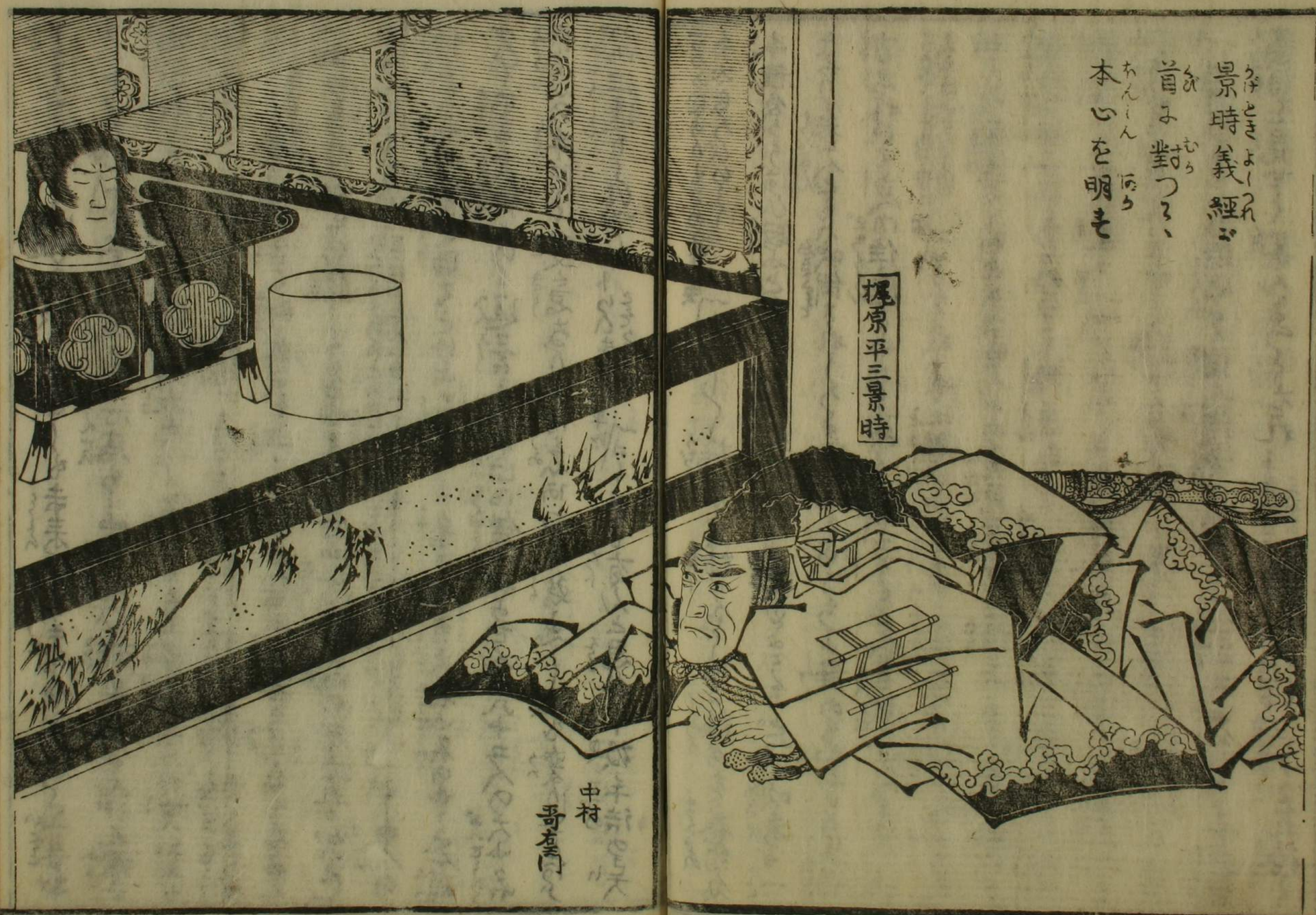
座をたふため

不意よのぞんぞく義つよ公は切腹なされ〳〵天命とハヤなげく全くきで
んの後言ゆ〳〵罪なきつゝゑ落命〳〵ふサアそこそふ細ゆゝん其
首生死よつゝ貴度の本意を探〳〵んゐのぞんぞく義り宇都
宮その氣をさろ〳〵て静ゐあ安産のさせんとい桜原どのくは本心
ふのさゐ賢慮ろぞりれいざゐ明〳〵下されよトいぎをたぞ〳〵てのべけれバ
平三 一字助宮ゐ怪ぞくさだろ〳〵不便や氣が遠ゆさちふな行んぐをろ静
めを助けふといゆぞくたなの畠山たゝ条なとゞ智恵自慢が胸するさ勢
〳〵てゆつたりや勝手ゞ宜ゝ死首を生せとい勢りふことゝ言さだろ桜
原ゞ夫ゝどゆ〳〵疑〳〵〳〵バ落つく返吏〳〵て呉ふさ トイふと 平三 一たゆ
人まつゝ落付へん〳〵て呉ふと奥くおいぞをさるゝい静を殺〳〵てゆま
ふ氣ゝさゆ〳〵ゆ〳〵ゆ親人の手をおろさゝ〳〵返ゆ〳〵此平治ゞ静ゞどん

胸〳〵〳〵ざゆ〳〵て弟らふゞ夫ぞゐいよ〳〵後者と生ゝ義経どの〳〵根を宣
氣ゞやの 平三 一をんぞゆなゐと忠義を存〳〵てさゆめ逆櫓諸軍勢の
ゆん中ぞく恥をたゆゝ〳〵形よくさ根をたつゝ氣を枯にゞ桜原ゞ本心
ゆ 一ゆりや死首の生ゆ〳〵を存ゞゞ助けぬ氣ゝ 平三 一りふゆゆ及ぶ三言
平三 一ゝれを今人平治ゞゆ〳〵悪とふい広方の目ゆい何とゆ〳〵る 平三 一けん大
めゞ呉見だゝ〳〵勘當〳〵ゆ裏をゝゝき已れゞ家侍にゝとふハ桜原ゆふを
呉見のたゆたゝなゆをふとの作り悪 平三 一ゆりや年月の悪とふい呉見のゝ
行と和ゐゞゝ後言の古の根を洗ひきゆむるゐ存ハないゝ 平三 一やアだゝ
くゝゝさ呉見ゞゝゝ己れがゐぞのかさゆゆゝよ渋ゐ返ゆをゝてくれふ
ぞんどゝゝ入んとゐ 一へやアどゝ〳〵静ゞぜんゆ凶ゆをなさべ安示とゝて
ゆゆゝゝゝ返ゆよ及ゞ手綱よ友綱ゞ手ハ見せあトカのゝよ手をゝけてゐべ

たりたちより父を
引きずりおろし
平作「ヱヽ浅ましや情なやより網にたまはれし朽木がく
れの忠義におそれり義経公の軍慮をそ狡く執ねるざん言し 以中本
和となし奉るろしろ逢さ讒者の根無はれこのごく友呈白手
端もやこのぬ亀丸がぐしへのそうりを口惜がり命を捨しも恥もさらば
義経の猶をたやさんとは此上もなき極悪人後代末世の恥をおもひ心を
汚さぬ静ござんを身籠らせくよし経公の御子を守そぐて罪を
しやまるこころは無ろ八十五人の大小名せうじを定めし手信の頭不会命
惜むよ何ん將ども倭人讒者と末世おぐくいれんとの口惜さ平作が異
見の仕そじめ仕そきめきて太くたぐこれ親人 きろれてたぐ親人とおもふかける太郎介
平三クワツト目をとめる
平三「ヤアいまれざる忠切なく一ちん思ひなつくる存綺ん立てとふ
まで武士の意地むやくの舌の根ろごろはなほきさりおちふと けりと思ひ因がくる

一ろの内よりもさめが井
系太まろびいぐ
系「かかしく梶原身柄ろんぐいる静めを巻結ぬ
千種妾がろげひ取ふとなさるゝ故番人どもが支ゆるうちどつと吹来る一
坐くり番人どもは吹倒されろうちへ廻るそのうちに静めもおふくいり行
方知れず也へ御住進なし上外る 平三「ヤアうろうろ者早く追つけハ ハツト
そくそくさめが井は
表へ出てうり行
系「ヤアうれしや土肥治郎千葉之助志づろ御おゝを逆ひの
手ちゞ首尾よくおともさせんとめ異見まごろよせ隙をとつうりくきり掛く
命の切羽をこまぬいて降参まちるろ 平作「たゞし讒者の名を立て末代
恥辱をのこし氣ろ 平三「ヤアぐとしいき異見よりづり静めを奪れし
不孝ものおつけさせく引くりめんたつせんト首桶たづさへ座をけたてゝ奥の
ひとりろよのりよる
系「ヤア親ぶうくも除めぐる倭人讒者の極悪人大小名まのひきう付追付
憂目を見せく呉んまつくそれ ト庭にとび下りかけ行を
系まちまとてとどり付
「アヽこれ待く


景時義經ぶ
首ゑ對つて、
本心を明す
梶原平三景時
中村
哥麿門

下さんせせめて此子を眼元まで〜もま未ぐ女夫でやとたつて一言お
つ〜ゆつ〜〜〜ヤアあらぬ梶原が心底もーやと思ひ探りしまざんげん深さ
極悪人〜さげ果て侍への血をもぐと引さるそち達敦子この世いおろ
未来永〜〜夫婦をやこの縁いきるさらば さらばとぐりあり切くんつこくもけ
なげくこれ去げさ桃〜〜きく町衆さぞ出〜〜〜このろふむぐ佛しゆる花衆もをやこ
一世のまうれじやもの悲〜〜うなのく何とせふ哀ぐひ詞のおまうれがおいと
ふんぬまうのなアいと〜〜〜といやまぬあぐ表の方さらぐ〜〜金〜ぐ〜四人の
平佐がきんぐ四早えの金吾たまま〜〜〜しくもうけ有り
仲まうせ千兼を助たまけ山ち犯わ〜条そのが大名小名のゆうを伺
ぐひ〜〜四まう友綱ち〜〜返答〜〜ぐれ山四鍛〜攻よせんと八十五人の大小名
用意の手たく〜変ま急ぎ四用えいつく急るべ〜又も変じとたう
ぐ四注進ち〜ぬべ〜〜トりひまま〜〜平佐〜〜〜さも有んと思ひ〜〜放手詰の矢

見も皆むざどかまのひハ友若亀丸くんぜもない者けーうけく討景
させ〜〜も敵人を喜仏はまうひだくうる兄弟夫婦が言合ユ〜〜こと
も水のなまま侍人さん〜やのたとおれば何ぬ〜〜〜よ宿へ人桃生ゆ〜〜妹
も死ぬ山景高も死まいやい〜〜何い科もない友若よ大死さ世〜云沢
桃〜かめた〜も追つい〜〜塞の河原ぐ従者同士〜〜切つえつ〜せあゆうよ
られ桃生ふさん桃〜〜いつ〜〜よ早ふ追つき外ふ〜ト〜よ微分えのり早く
父桃〜〜まぐ夫お先へい〜〜待待るさぞうめた〜が待〜くいよふ〜〜友若も怪
待んられのふ母も今ゆくそやトまぐいのそばよよ〜りよりえぐりくりさくる
やいををぬけばち〜〜のくさたちる我子よ よよおどものく〜〜ばをまくりつあく
あぐつきひさよばさ上なくつ四浦て行ぞえ〜れ〜〜平佐〜〜〜サ〜いさ紀よ〜〜〜系るもいぐ
おつ〜〜うんいぐあ〜〜うんとりろそぐめぐりつさ〜〜〜るもんくの平佐〜〜ヤアをや人仁義の
〜〜〜ぐまきつぐがぐとつきく〜〜〜りま四〜〜〜あげよ大音上
後古よ責つけれん苦〜〜きく死をせんよりも紫よく服なされ。とふも

むかしに勘当なりし源太どのに悪をかつくる悪心をひるがへさせてくんせ

と共いふとつがふの詞のうち次平治が素首おまへまゐる　ちよつと千丈によおねぶとぶめさへんと

平三　ヤアく平治とやめをさらにな言さら子細なり然しく　卜云ひ/んさを

平三弟とさき兄を大納言ぶびくへ上び平治一呑ご衆あがらなりそのまゝ称なく人今ぞ死

さかゝりはけへ入召されてのりつけ

ぐせく此平治きく子細なんにも有の　平三　ヱヽ助のぶんと見よ此一ッ我

本心を出し立しよめや姫上言傳もる梶まで實正ハ此惣首への中

まけ苦しくとも暫時まてまよ　卜首をけ上座になやくく一つの衣ことを直しとさき紀までやしく座をと言りあげしをなく

平三　ゑかゐまろ　一ッ先此首まく我首を義つけ公の御前に出し一家の實正をこ

紙に書してめ會状なくやまけ仕べんと存ぜしに是も圖縁のがれ

まで伊達錦戸がこゝろ変り天命つきさせ又ひしへ

存よし經公を讒言せし八平家西海の浪に沈み源氏歡歌を上るの

時まれハ逆櫓の爭ひより諸軍の心を一致させんと都に帰り旅鋑せしに西

會の同勅とて大納言重虎まれを招き此度の合戦源氏の歡御きかに

るま今度より朝へ返付おふせつけられし平家こそ討とるべきに帝の

正統安徳帝うまよへふせ又ひしく神宝うせ今世又ひしれ是全く

頼朝が武勇にあらり王位を望むよし經にいひ含めかく斗ひし

物なるべし惣じて今度の軍立ちらどをを助けるてだてもなく王位

たりとも恐れざる〽ぐんりよの經こそ其上なんぢ軍中に都よのぼり窺ふと

頼朝がたかふひまなく帝位をうかぶふ大望なかんとありつくの外の逆謀

言訳なのふべし〽笑んと思ひかけけめ雑説されもる所それらの公家たち

大望なつく頼朝公の御身のうへ帝へぎんぶんまるものなんまた鋑念の

御大事と心づくより思慮をめぐらし此度の合戦まつさく頼朝が軍慮を

ものぶ安徳帝を助くべき旨りふ〜〜食めくらべども義経武勇よ高まん
〜かる鬱ひかふむり〜ハ是義つひが抖るりと心よ思はぬ後言いより
朝公を助けんと一を[illegible]ぞん孫ん 重虎が思ふ所よりつ〜よや世が頃よ
いつつりあくび猪神きよぶつを折ひまりけ抜紙をさげ義経がぜん
恵を告ふせより〜他言せび軽胡が身上なるべ〜よくくふるやべ
〜とのつ引ならめ手徒のせへ〜ハく畏まりたてまつると恐ろ〜た神
文〜て重虎よ寂せ〜ハ軽胡ろの巳身をかだひ〜この多をもてるかくごたまろ〜めきれぬう〜つよ
公さのろのひのぶよまんど源氏重代の白鎧ふんどつハアなむ三だう軽て
ほ〜ふくまたぶれたるつさへ
よ〜つよ姉川の巳西よまま〜よさび帝の巳へうつよく後よ弱倉
のい大ゆと思ふよ付くも家君よ〜よけくのまれぬざんぐいまざんげ
んよ後言を重ひなんなく都を発ち下義つひ公ハ異へぐり秀

働ぶ敬ふつきまふハアろろ安やと思ふ析うふ重虎まれを寄よ招き使おえ
助をかろ〜ひ王位を屋むと兆道のふ早速一味とれ〜ぶし心よ思あ
連判〜〜使ぶく作が奪ひをき〜御鎧を軽〜のまる〜工て姉〜やか
まろ〜よ立夜りなべ〜をん義を奥列へ寄よをくり手〜せんと思ひ〜ひ
も情なや錦戸伊達ぐろろ変り落命ひりしと巳首を霍が関よて見し
時のい景時ぶ肌のくる〜さ悔むよのいなくいう〜ハ義経の巳吊ひよ命を
ま〜〜ん死後よ至つ〜〜い巳をんたと捉ヨ〜〜ぶ奪ひをきたりと せめ〜巳名を
ま〜ぐんため一倍ま〜〜る恵言雑言「[illegible]嫁むまあ悔や 眼あこ
見ごろせ〜ハ主人を修せ〜梶原が血徳を引如〜義つよ公へりの〜よけ
せめ〜くの其方ゲト死〜なよ安婿させんと只今まぐ包こかくせ〜一大ゆ
明まいまるまち巳貫へや上る家ろ家まんといの一とるく巳きくとぶけ下さん

ト生うるんはいふごとくれをゑし我をゑ言く命を捨しざん言の口につられ 平清「ハア有難

源氏の大将殿のどん讒者の名を流したがひまれある景色なり

やかましけれや其本心をきく上は平治がこころの内へ極らく浄土此の心をつも

むくり咲せて守るが菊町や桃花ぶがら々を死せはせまのもの三人のこと

もが修羅道のくげんをせめく晴くるこれこの死骸へ一言二言の門跡ごひ

たのみ上る「たのみ上ると深手の平治すがりよりて天のしぶんを〆上れば王が子くをたたきしめくるとしげるおもしげ相は 平三「アヽ忍深

くも恨みし其胴むがふかくせし本心へ未来をくまら々く安堵せよつられ

此ふく々ご伏の中にも。源氏の舎弟へまてぐどのへども梶原が讒言に依

て空く首大太の軍功をすごされ 平治「もりや義経公の御ふぐくよかぢ原が

讒言に依く 平三「手～梶原がざん言と末世末代よい生れんと此梶原が未

来の本望千万人のそしりをもかへしも辞むよいへ孫どもも年端も行ぬ

孫どもが係人讒者の名をえぢく切ドとよしこ其時へもりさく胸を

ふくく付えりを持もる苦しさへ修羅のくげんを目のまへぐく見ごろしくて

梶原がこころは鬼でも蛇でもあるへ此言訳を孫よりもよいむく咲せて未来

ぐへちい気者らと一言も咲せまよ姓者べきらせてくれ祖父らとよんでく

くれいよウ「きうろせくくれ身のほどを思ひば志太宰はげ殿そまとれるいふ 目でりつぐまし面影まありくしてうる夕立のためやさあしむせびる平治

くるしさく いきもつぎ 平清「ハア々なつかしれの御大臣とらしつき讒者の名をゑくくせつのくつそ

隠されし父の忠義をきくうへは暫くもいきかる種のわんしんを背く道

理かけ高もいとあつの手あつくん 平三「まていきだよふ成仏せよ 平清「さらばさらば よおさらば

常「ヤア々梶原犬死さるな志むしりし ト書中より声をかけて生首引さげ ひざもぢかうきけるぜんとうくかくれを

平三「ヤアつれなし海老るせがれが死をとぶめしれ梶原が後ぐさき侍と世よ

奥へいせん詰檐よるト かいぞん座子 をりたつく 常「たださへ必死とぶめしれ倅が忠義をを

立させんと兵弁かられ此生首江田源蔵が忠義まよつてく身がはりと申し

山員を義経とてんどくの辭ごせんをも手まなし其本いをきざこうん
ため其心魂をどくろよ寄〳〵まぬ〳〵ぐ右義を吟沼〳〵い天地のいぐこ
海辺いちのん拙ままとのふ右居にのつく頼朝公を身優まれべ海辺ると
のふ右にのつく〳〵義経そのかげ身まそひ出身をゆつさせ宝剣をんゆ〳〵をる
祈もとあ新ひを帝都よたくさん〳〵いや義経公ぞんあいと頼朝公〳〵吟
へなべ梶原これまぐ遂言せ〳〵其功むを〳〵くちのん疑念をそこ居いを
卜部首をざとつれなくりてなさべ八十余人の強大衆いよく怒りの二氣を
たつ〳〵恨この刃よかぢらふぐ命まとるハ本望なりそ〳〵我死後よ義
経公京鎌倉よ出入のなべ諸士のめんく心を乱〳〵又四兄弟の不和と
あらん常〳〵りつとも至極のとげめなり十握の剣手よりハ其時こそ
さ出たをとともよ海辺るなり和めしぐ忠節より〳〵経公出後合の拙を

かくり六十余別よのぞこあるさ判官どのく出供〳〵嘶夷ぐ千嶋みを〳〵
海辺り唐高麗なる攻なべけ四百余艘よ家君の清和の氏をかやの
さん和豆ぐ秘密の底せつハ余人の耳目よさ〳〵きこめ海辺るより外なる
者なし〳〵也去世まぐく梶くぐ遂言の話よ義経公の浪命たりしと
いひ傳へ唐と日本まに連枝の枝ゆふを蒙〳〵中させんハ梶まくぐ義をか
んじ出ひごちむくり海辺る雲よまくぐり浪よのる仙術ひど四つの平略
たりちつとも氣づのへまのふな〳〵きづくハのるなと梶くぐ義をんを取り仙人ハ
ろこ〳〵遠ものきろあびけ浪和氏の清の字を清と
今もつさ〳〵義経さ氏ハまほんはまれぞとこんぜあんはるる〳〵ハ〳〵たのりや山上
ハ思ひをくるの一つもなし〳〵れるれしやト
と河のうちふたろ〳〵りと矢ひとつ来つくかぢくぐ義経の刃ハ五ふり
せんへハけりとあつくくうせまりこハ何やつと人ろ平ぞよ友つるハをもそのそこと
まくりくまぶ〳〵の氏にもたとあぶ〳〵弥
ものこんもぎりつくとのり大音声時ふて〳〵ヤア〳〵梶くぐ義経おのれ知智の

常陸坊海尊
景高が死期を
密使を語る

侍淡ゆく子を殺し書をさく眼お理兆を足ゆくも後者の舌の
根ひるへさび鬼畜よおとり大悪人巻ぎぬ千草ぶ働きゆく静ゆおを
奪ひとり土肥治良千坊ふ助二人の夫よ手淡し其座よ立つく自害
せんにつれ已れよ似ゆるあ貞女ふくん宴よおろぶゆ天より責る拾
悪人よりとも公へうめ上八十余人りつりつ呂今ちんぢを中更義
経公のきゆよゆまん青乃ゆよそりこばち永くちぢゆくをゆさへんと徒
士のめんくをしあうりされども友つる用ゆよ義子を拾しちん弁さ
肉をかむとものさたらび怨えの一矢きし而をたづし先立ものく遊言
ア手をこゆめくく降参し別れ友深夜よ義経のゆと昂ふいたてま
つんや〳〵ヤアたくちも切ぬゆ雀のおこのましくもきやべつたり逆捻の
遺恨と立ちふに家お存ゆゆとふり是をこよト切び見下ふ体
ふくつれば〳〵このわご

きゆくあ傷人めひづれもきゆれト河のうちゆ足ゆ
大ゆ名さまこう後もまこり手よ義ひうきゆり
ゆくくよかくどくと徒ゆけこり平三〳〵ヤアかし〳〵まし〳〵い青幅めふ今の奥まれ
たるゆ拾ゆものの大だこけよ仕官しくく心ゆふび呂人うちふをかつさげき
冥途のとものよ青だいめふうめふげ命ゆ十石とつこりとくく盗ゆう
び呂下ゆふまへしなびゆ首の追善のたあ助けくくれるコリヤかゆ
らぶ小死び取く青だいめふぶ手柄よせよトゆくくたつてるゆせいとひ
とりよゆよくれぬふしぎら
せんじゆつト浄瑠璃村のうちどふくゆく半平張場うのぶん仙ゆ面の
りんをむもびゆびせう上ゆ陸手者ゆれゆくるし
〇深いこゆ半平
陸だう義経をたちくゆる青くめうくうごゆ巌石むふとりの青のくゆ
浪よた林だゆえまくゆ中をゆうくと立別れ白く夢腹ゆいどみざ
の利けん稲妻のかさちへきくく見へ中び侍人後者の名を孫び梶
原平三景時ゆ最期のゆどこそ勇くしくれト山海ゆりの肉侍大ゆう

かゝらふとまる海苔のいんを結ぶ皆〳〵よりけれぬこるゝをの〳〵よろし
く有る〳〵海苔まづ〳〵切の中〳〵皆〳〵榊まつ〳〵よかる海苔みき
いんを結びなぎ〳〵切の中〳〵せり下る榊原ちり〳〵刀をつきこむ昭終
どろ〳〵まく〳〵
宜〳〵幕

和布刈神事巻之第四終

高埜所藏